

分担研究課題名

発達的な観点から見た療育指導の在り方に関する研究

分担研究者報告書

分担研究者 福井医科大学小児科
小西行郎

<リサーチ・クエスチョン>

効果的な療育相談の在り方はどのようにすべきか

<研究目的>

地域保健法の改正により平成9年度からは障害児の療育指導は保健所の重要な事業の一つになる。しかし、現在行なわれている障害児の療育はさまざまな問題を含んでいる。そこで、我々の班の研究目的は効果的な療育相談の在り方を検討することであり、最終的には発達相談マニュアルを作成することにある。そのために班を二つに分け研究することにした。まず第一の班では最近目覚ましい発展をしている神経発生学や神経生理学などの基礎医学の新しい知見や胎児から乳幼児までの発達行動学的研究の成果、あるいは電気生理学的検査の新しい結果などを踏まえ、療育やリハビリの効果などの理論的根拠を構築することを目的に研究をすることにした。第二の班は現在行なわれている療育相談の現状を分析し、乳幼児期から学童期までの問題点を明らかにし、解決方法を探ろうとするものである。そのために、今年度はまず文献レビューをし、あるいはフジビリティスタディを行ない、研究計画を立てることにした。以下各班員の研究結果や研究計画などについて述べる。

<研究成果>

①第一班の研究成果

乳幼児精神神経学の分野では胎児や新生児のいくつかの能力についてさまざまな研究が行なわれ、いままで解からなかった多くの能力を持つことが証明されてきた。そして、それが胎教や超早期訓練の理論的裏づけとされてきた。しかし、こうした研究は胎児期から経時的に連続して観察したものは少なく、また胎児や新生児の行動と神経組織の発生・発達とどのように関係しているか不明なことが多い。小西は胎児から乳幼児までの自然観察

を通じて胎動から随意運動への連続性を検討した。さらにPrechtlやThelen,あるいはForsbergら発達神経学者らの文献も検討し、胎動と随意運動との関係を明らかにし、行動の種類によって、胎動から随意運動への移行にいくつかのパターンがあることを見いだした。そのなかで協調性の強い行動については胎動から随意運動に連続して変化するのではなく、いったん消失し、数ヶ月後に再び出現することも見いだした。このことは胎教や超早期訓練の効果に対する一つの疑問になると思われる。また最近新生児が意識的に行動をしているのではないかということが言われ始め、随意運動が生直後から存在すると言われるようになった。これにともない脳機能の局在についても報告が見られるようになってきた。二木は1才未満の乳児に脳波トポグラフィシステムを用いて哺乳、注視、操作、情動などの行動にともない出現する律動的 δ および θ 波の局在を調べ、各行動に部位特異的な律動波が見られることを見いだした。このことは乳児脳の機能分化を示すものと考えられる。このようにして正常新生児・乳児の脳機能を科学的に明らかにすることによって、今までの発達神経学とは違った発達神経学が構築できていると思っている。

小児の脳の特徴は可塑性に富んでいるということにある。脳の発達過程はこのような脳の可塑的変化の集約的な発現の場であり、この過程の神経組織学的、生理学的、行動学的動態を理解することは、心身障害児の療育指導をしていく上で重要な示唆と理論的根拠を与えてくれることになる。川口と山本はこうした立場から脳の発達と可塑性に関する国内外の文献考察を行ない、さらに自らも動物実験を行ない、神経修復について画期的な研究結果を得た。特に川口の研究ではいままで再生能力がないと広く信じられていた哺乳動物の中樞神経が極めて大きな再生と自己組織化の能力を有していること、そして、その能力をうまく発揮させることができれば機能的にも十分に回復することを明らかになった。山本は顔面神経軸索を切断し、ふたたび縫合することによって軸索の再生過程と中樞シナプスの可塑的変化を電気生理学的・形態学的に検討した。その結果切断縫合された軸索の機能的再生が11日という比較的短時間で起こり、再生が完了するまで中樞神経系でシナプス結合の可塑的変化が一過性に起こることが明らかになった。末梢神経の再生過程でおこる変化を詳細に研究したものとして注目されるものである。このようにして末梢神経だけでなく中樞神経系においても神経修復が起こること、その過程に起こる一過性の可塑的変化などが明らかになったことは心身障害児の脳や脊髄の神経回路を修復することが必ずしも荒唐無稽な夢ではなくなっていることを示していると思われる。

②第二班の研究成果

第二班は現在行なわれている療育やリハビリテーションの問題点を探り、療育相談の在り方を追求するものである。この班では、まず障害の早期発見の意味の見直しから、障害

の告知、心理的療育、運動療法等の見直しを行ない、さらに学童から学童以降の障害児の療育について検討を加えることにした。

脳性麻痺が早期療育によって治癒するという考えが主張されてから久しい、とりわけボイター法、ポバース法が導入されてこの傾向はより強くなっている。しかし、最近ではこうした早期療育の効果に疑問を呈する論文がいつか報告されるようになってきている。北原は療育センターの所長として長年障害児療育に携わってきたがその立場から早期発見・早期療育について文献的考察を含めて検討する。

脳性麻痺や知能障害などの重症障害児の療育だけでなく、最近では自閉症、学習障害などの発達障害の療育の重要性が叫ばれている。白瀧は児童精神神経医の立場からこれらの疾患の診断や療育に取り組んできた。今年度はこれらの疾患の早期診断について、1才半検診でのチェック項目の選択を文献的考察を中心に検討した。その結果、従来のチェック項目だけでなく社会性の障害が初期から現れることを明らかにした。そして、この障害を早期に把握する手段として、母子愛着関係の発達についてチェック項目を設定しておくことが必要であると考えている。

障害の早期発見について、その結果をいかに親に告知するかも重要な問題である。広川は障害の告知とそれに伴う親の障害受容についてその過程と問題点を肢体不自由児施設の措置児・退園児の母親に対してアンケート調査を行なうことで明らかにしようと考えている。今年度は文献考察に基づき、質問項目の作成をした。

障害児の療育は医療・福祉・保健・教育等の社会的システムが連携し総合的に機能することにより効果を発揮するものである。いままでその効果判定に関しては障害の軽減を医学的に判定したり、発達心理学的に評価することがほとんどであり、親や本人が各種の療育サービスに対してどの程度満足したかという報告は少ない。八木は兵庫県の肢体不自由児通園施設や養護学校に通園、通学している乳幼児、児童の親を対象にアンケート調査によって療育の過程での各局面における満足度とそれに影響を及ぼす個人的・社会的背景を明らかにし、療育の各局面における介入の方法を検討する。広川と八木の調査は親や本人の側から障害児療育の問題点を探ろうとするものであり、療育を考えるうえでは非常に大切なことである。

肢体不自由児に対する理学療法や、言語障害にたいする言語療法は多くの施設でさまざまな療法が行なわれており、障害児の親が療法の選択に際し、混乱したり、不安になったりすることがある。北原は理学療法の、松木は言語療法や心理療法の問題点を実際の臨床経験と文献的考察によって整理し、その有効性と限界について検討する。

いままで障害児の療育とは就学前が中心であった。しかし、ほとんどの障害児が就学し

重度の障害児も通学するようになっている。富和は学童期以降の障害児の医療的需要を明らかにするために大阪府内の肢体不自由養護学校在籍児について、アンケートによる予備調査を行なった。また大阪市立総合医療センターに入院した重症障害児については医師だけでなく多くのコメディカルスタッフと共同検討を行なった。そのなかで医療機関、学校、地域保健機関の共同による継続的ケアが重要であるとの結論を得た。

リハビリテーション専門病院や障害児の収容施設では対象疾患の変遷、患者の高齢化、障害の重度、重複化などが大きな問題となっている。栗原はリハビリテーション専門病院の医師として障害児の療育に携わってきた。今年度はこうした問題を自分の病院の病棟の入院児、重障児施設入所児、精薄児施設入所児を対象に調査した。先に挙げた傾向が認められただけでなく、後天性の脳障害をもつケースが増えていることが解かった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<研究目的>

地域保健法の改正により平成9年度からは障害児の療育指導は保健所の重要な事業の一つになる。しかし、現在行なわれている障害児の療育はさまざまな問題を含んでいる。そこで、我々の班の研究目的は効果的な療育相談の在り方を検討することであり、最終的には発達相談マニュアルを作成することにある。そのために班を二つに分け研究することにした。まず第一の班では最近目覚ましい発展をしている神経発生学や神経生理学などの基礎医学の新しい知見や胎児から乳幼児までの発達行動学的研究の成果、あるいは電気生理学的検査の新しい結果などを踏まえ、資育やリハビリの効果などの理学的根拠を構築することを目的に研究をすることにした。第二の班は現在行なわれている療育相談の現状を分析し、乳幼児期から学童期までの問題点を明らかにし、解決方法を探ろうとするものである。そのために、今年度はまず文献レビューをし、あるいはフージビリティスタディを行ない、研究計画を立てることにした。以下各班員の研究結果や研究計画などについて述べる。